



藍舟はづき

魔獣大陸

Anima Solaris

第1章 聖都デルレス

デルレスの神官クラカーシユはまるで夜盗のごとくに影をつたい足音を忍ばせて進んだ。風に流される銀灰色の千切れ雲を満月に近い月が照らす空は真昼のように明るかったが林立する巨木の下は闇に沈んでいる。しかしクラカーシユが目をこらすと木漏れる月光のなか微かに黒い衣がその足取りにあわせ揺れ動いていた。この夜更けの神宮殿の広大な中庭で彼が尾行している相手はエズダゴル。皇帝の覚えめでたき魔道師である。

風の強いその夜、常にもなく風音が耳について寝そびれたクラカーシユは月光に照らしだされた都の偉容でも眺めようと寝苦しい部屋を出た。寺院外壁の望楼に続く小径で怪しい人影に誰何の声をかけた警備の兵は相手が高位の神官であることを知るや慌てていまひき抜いた剣を背後にまわしその場にひざまずいた。

「いや。そのままでよい」

クラカーシユは自らの気紛れがこの真面目な一兵卒の仕事をさまたげたことに微かないらだちを覚えながら言った。

「邪魔をしてあいすまぬ。急に風にあたりたくなくて寝床を抜け出てきたのだ」

「どうぞ足元にお気をつけください、猊下。この先、かがり火の灯のとどかぬところもございますゆえ」

「なに、この月明かりだ。心配は無用」

そう言いつつもクラカーシユは妙な胸騒ぎを感じていた。あるいは揺らぐ灯火に奇怪な形で踊り戯れる影たちのためか？ 彼は自分に問いかけたが、その正体不明の不安は収まる気配はなかった。

「妙に生暖かい風だな」

「はい、春の嵐の前兆と同じ潮の匂いがします。明日には間違いなくひと荒れ来るでしょう」

「しかし冬も間近いというのに……」

「わたくしもこんな年ははじめてです」

これもまた変異の兆しのひとつなのか……ねぎらしい意味を込めて警備兵にうなずくとクラカーシユは神官の徴である赤い衣を風にはためかせて望楼へ昇る石段への道をひとり辿った。

東の海から遮られることなく吹きわたる湿った風は気持ち爽やかにはしたが不思議な胸騒ぎは消えることはなかった。しかしそれをしばしのあいだ忘れるほどそこから眺めはいつにも増して彼の心を魅了した。眼下には聖都の全容が広がり……すでに家々は眠りにつき灯を消してはいたが、煌々と照る月の光が町並みをくつきりと明暗のなかに映し出している。ところどころ揺らぐ光は時ならぬ強風が吹き荒れる夜半の火事にそなえて夜回りの者たちがつ

めている広場のかがり火だろうか。そして市街地の広がり
の彼方、月明かりに銀の帯となった聖都を取り巻く三重の
運河のさらに外側に、まるで天の星をばらまいたかのこ
とくおびただしい数の瞬く灯が見てとれた。故郷を捨て聖
都と皇帝の慈悲にすがらんとする難民たちの野営の灯火で
あった。闇と野の獣への怖れが思うに乏しい木ぎれをくべ
てまで夜の明かりを絶やさせぬ理由にちがいがなかった。

ほかならぬ彼ら難民の救済問題こそ神官の安眠を許さぬ
焦眉の急なのであった。冬の足音も間近く、食料も燃料も
乏しい現状のまますておけばこれら難民のうちに多数の餓
死、凍死者が生じることが必定。もしも事態を看過するな
ら遠からずこの者たちに端を発する騒擾、暴動の類いが発
生し帝国要たる聖都の治安さえ危ぶまれるに違いないのだ。
しかるにクラカーシュら長老議会派の神官たちの救済政策
討議の申し入れはことごとくエズダゴルら魔道院を中心と
する一派によって退けられていた。

何より問題なのはこのところ陛下が何やら古文書研究と
いう名目で魔道院内に入り浸り政務にかかわる下命、言
上すべてこの魔道院長を通してのみ行われることである。
いったい神聖皇帝陛下はこの国難をいかにおぼしめしてい
られるのであろうか？ 遠くまたたく灯火をながめつつク
ラカーシュは溜め息をつく。

クナア平原を埋め尽くすかのごとき夥しい灯はまるでこ

の聖都が反乱した軍に包囲されているような光景ではある。とはいえ自らの胸騒ぎは必ずしもそうした杞憂からくるものではないことがクラカーシユにはうすうすわかっていた。いかに臣民が困窮しようと神聖皇帝陛下の統べる国家体制そのものが根本から打ち倒されようはずもないではないか？ なぜならこの神聖国家の権威は神々自身によってもたらされたものであり、いまなお神殿の奥深く眠る古の神への怖れが人々の意識を今なおしつかりと帝国への忠誠に縛り付けているはずだからである。この帝国を滅ぼすような力が仮にあるにせよそれは人の心に発するものである。うはずはない。そう堅く信じるクラカーシユであった。

われ知らず彼は都の中心に聳える聖塔——ジッグラトを振り仰いでいた。これこそこの神聖なる都がはるかなる太古、人の手によらず造り上げられた奇蹟の証し。高さ300ガルに及ぶこの螺旋状の尖塔はおそらく全体がひとつの岩石から彫り出されたものであり継ぎ目ひとつない。

悠久の歴史を経ながらもなおほとんど摩滅することのないその神秘の材質は人間に知られたいかなる鉱石とも異なり鑿、げんのうの類いで傷ひとつつけることもかなわない。神宮殿の中心に位置しながらもこの塔の内部に立ち入った者は彼の知るかぎり一人もないのであるし、また誰ひとりあえてそこに踏み込もうと本気で考える勇気のある者すらいないであろう。それは神自身の墳墓、荒らぶる旧支配者

が永久の眠りをその内にむさぼる褥にほかならぬからである。

かつて人間が知恵も力も持たず獣とともに山野に暮らし
ていた太古、星ぼしの間から忽然と神たちは降り下ったと
いう。金剛力をもって神聖大陸そのものを海原より引き上
げ、いまだ魚が跳ねぬかるむ地に壮麗きわだつ都市や橋梁
や道路を建設し、神々は生まれてまもない人間にそれらを
維持し管理する役割と手段とを授けた。帝国がこの世のあ
らゆる地に君臨した数千年の間、神々は聖都神殿の玉座か
らともすれば暗愚へ落ち行く人々を王道楽土へと導いたと
語り伝えられている。

しかしそうした繁栄の最後の時代に何かが起こった。慈
愛に満ちたこの庇護者は突然恐ろしい破壊の神にその姿を
変えたのである。それまで彼を敬し崇め慕ってきた人間た
ちはこの由々しき変貌にただ戸惑ううちに雑草のごとくな
ぎ倒され虫けらのごとくに踏みにじられた。やがて破壊と
流血の数十年が過ぎ神はその狂乱の末にすべての力を使い
果たしてこの聖なる塔の内深く何時果てるとも知れぬ死の
眠りについたという。

すべてはあまりにも遠い過去の出来ごとであり、それゆ
えそうした神話にどれほどまでの真実が含まれているか誰
も知らない。とはいえ、いまこうして聖塔を見上げながら

クラカーシユはすでに知る者もないその悠久の昔から人づてに語り伝えられてきたある不吉な詞文を口ずさまずにはいられなかった。

「永遠の憩いにやすらぐを見て、死せる者と呼ぶなかれ」^{*}
果て知らぬ時ののちには、死もまた死ぬる定めなれば」

(*) 宇野利泰訳、H. P. ラブクラフト「クトゥルフの呼び声」より

果たしていつかある日、ジッグラトの難攻不落の壁がその内部から崩れおちる時が来るのであろうか？ そう考えるだけでこの神官は身内に冷気が吹き込まれたかのようにいたたまれぬほどの戦慄を覚え、それゆえにいかなる慢心にとりつかれた心であろうとこの聖塔を一瞥しただけで、必ずやこの聖都を陥としあえて侵略者として神宮殿に入城する野望など失ってしまうに違いないと信ずるのであった。

しかしながらその夜、そうして黙然として聖塔を眺める視野の端にちらりと人影らしきものが動くのがクラカーシユの意識をとらえたのは奇しき偶然であったのか、あるいは虫の知らせとでもいふべき何かであったのだろうか？ 人のものとしてはあまりに素早い動きゆえに夜景を眺めるに疲れた目のまよいとも一瞬思われたものの先程からの

胸騒ぎにうながされるかのように彼は全神経を集中してその城壁の一隅、かがり火の明かりと闇のあやかな境のあたりをじつとうかがった。ふたたびちらりと何か動き、クラカーシユは突然身内がかつと熱くなるのを感じた。神聖なる宮殿に大胆不敵にも煌々たる月明かりの夜に怖れを知らず忍び込む輩やある？ それはデルレスの眠れる神への冒瀆以外のなものでもないはずではないか？ すばやく首をめぐらし警備の兵士の姿を捜すものの、あいにく声の届くほど近くには誰一人としていない。そのうえでもし今日を離せばその黒い人影を見失ってしまうかも知れない怖れのうちにこの神官は、単身望楼からの階段を駆け降りると侵入者を見かけた城壁のあたりまで大胆にも法衣の裾をたくしあげ小走りに走り寄った。

そこから見わたす神宮殿中庭は木々が鬱蒼と茂り月明かりに照らされる樹冠をのぞけば地上は闇に包まれている。もとよりここ神宮殿は聖都の中心部に設けられた古神殿が長い年月の間に大半が埋めつくされたその土壌の上に、新たに庭園を配しさらにそれを取り囲むように建設された魔道院をはじめとする各省庁やクラカーシユの勤める寺院、上級官邸、そして神聖皇帝ご自身の住まう御所といった諸々の政務にかかわる建物の総称にすぎない。それゆえ各建築物を結ぶ通路をかねる城壁に囲まれた広大な中庭はかえって外に広がる市街の明かりもとどかぬ暗闇であった。

月明かりに慣れた目には何ひとつ見えず、またじつと耳をすましても何も聞こえず、慣れぬ動きに息をととのえながらさきほどの胸の高鳴りはどこへやら、クラカーシユは当惑したままその場に立ち尽くすのであった。あるいはこれは正体不明のいらだちがもたらした幻覚の類いであったのか？

…否、彼は自分自身の迷いを叱った。ふと足元に落とした視線が月の光のなか小さな端切れを見出したのだ。ひろいあげてみれば半ば渴いているものの運河にしばしば自生する浮き草の一種である。さらに目をこらせば城壁の外から黒い小さな染みが中庭に臨むこの地点まで点々と続いている。まちがいはなく人目を避けるためデルレスの環状運河を泳いで渡らねばならなかった何者かが城壁をよじ登りいまさつきこの場所を通過したのであろう。

夜警を呼ぶべく声をあげようとした刹那、クラカーシユはまたも別の人影を目撃して沈黙を選んだ。なぜなら今度のそれは闇にまぎれんとするも日頃見なれた黒い装束…：神宮殿につめる魔道師の着用する外衣だったからである。その歩き方からこの人物が人目を忍びつつ行動していることはあきらかであった。あるいはこれは恐れおおくも皇帝のお膝元、この神宮殿内部でけしからぬ謀略が密かに進められている徴であろうか？

神官クラカーシユはそこで警備兵を呼ぶかわりにそつと

間近の階段を下り、木々の陰をつたいながらその魔道師の不審な動きを見逃さぬよう尾行しはじめた。この夜クラカーシュにとつて強い海からの風が味方したのは幸いであつた。もしも不用意に風上に立ち外部から庭に忍び込んだいまひとつの怪しい人影に自らの匂いを嗅がれでもしていたならば、こうしたもののふめいた振舞いに不慣れな行政神官の生命はたちまちのうちに奪われていたに違いないのである。なぜならそうして木立の間を抜けて月明かりに照らされた瀟洒な東屋にその不審なる魔道師が立つたとき、しめしあわせたかのように背後の茂みから忽然と現れたのは人ならぬ一匹の魔獣であつたからだ。

思わず息を飲んだクラカーシュはあわてて庭木の背後に隠れ、暗がりからこの一人と一匹の様子をうかがつた。

「どうだ？」問いかける声でクラカーシュは魔道師がほかならぬエズダゴル本人であることを知つた。わずかな躊躇いの色もなく彼は現れた魔獣に歩み寄りそう訊ね、異形の侵入者もまた何か答えている気配であつた。しかしあいにく両者は互いに耳を寄せ小声で囁きあっているために神官の潜む場所までは会話の内容までとはとどかない。ともかくここから窺うかぎり魔道師がなにやら相手の報告を聞きまた克明に指示を与えている様子である。

肝心の会話が聞き取れぬことにクラカーシュは身悶えする思いであつた。エズダゴルは帝国魔道会議長にして魔道

院長、加えて皇帝顧問占夢官までも兼任し、先帝の弟君グリムラン摂政殿下をも凌ぐ影の実力者である。このところ一連の御前長老会議でかのヴァミタドレス山攻略を強く押す急進党派の後ろに控えているのがこの人物であることを宮廷人誰ひとりとして知らぬ者はない。それゆえにかかる夜半人目を避けて、ほかならぬその暗黒神ドルの魔宮から訪れたとしか考えられぬ魔獣の一匹に彼が出会っているということとは到底見過ごしてはおけぬゆゆしき事件であった。

近年大陸深奥のヴァミタドレス山中を除いて魔獣が人間に目撃されることはめつたになく、各都市近郊でそれらに出会うなどあたかも聖都の大路を肉食竜が闊歩するかのときあり得ぬ出来事と一般には思われている。しかるにここはほかならぬデルレス神宮殿の中庭である。この魔道師のふるまいを見張りつつも彼はあるいは悪夢でも見ているのかと幾度も自らの覚醒を疑うのであった。

「わかったら行け。気取られぬようにな！」

エズダゴルが身を起こしつつそう告げると魔獣はふたたび出現した茂みのなかに闇に溶けるように消え失せて、後には魔道師ひとりたたずむのみである。そうして月を見上げ……時を計ったのであろうかエズダゴルはきびすを返すと、来たのとは逆の荒れた小道を選び歩き始めた。それはほかならぬかの聖塔につづく路である。クラカーシュはい

かにすべきかおおいに迷った。ここはすでに城壁からかなりの距離の場所。今大声で警備兵を呼んだところであのすばしい魔獣を捕らえることはかなうまい。またたとえエズダゴルの身柄を今ここで押さえたところで魔獣と密かに会話をしていたというだけでは陰謀を証拠だてることはかなわぬ。むしろ彼が今どこを目ざし何をたくらんでいるのかその尻尾をつかむほうが得策かも知れない。そう心を決めた神官は気づかれぬよう一層の注意をはらいつつ魔道師の後を追った。

小道は巨大な一枚岩の壁の前で終わっていた。エズダゴルはためらう様子もなく左に折れ、滑らかな岩盤に沿って歩き出す。クラカーシユもその後を追おうとするが、さすがにこのあたりは木立も少なく月夜に身を隠すものひとつない草地を行くのははばかられる。さらに悪いことにしばしばその気紛れな月は雲間に隠れて城壁を照らす灯火から遠く離れた夜の闇は一寸先も見えぬ帳となり、追う者は立ち止まるほかはない。対するにその間にも修行をつんだかの魔道師は魔界に通じる何かの手段によって道筋を感知するのか、彼我の距離を離していくのであった。

焦った神官がもはやこれまでかと観念したとき、不意に魔道師はその足早な歩みを止めた。すばやくクラカーシユは身を伏せ夜の帳が自らをひと茂りの灌木とまぎれさせて

くれることを祈った。昼間は人々の目にその高位の身分を知らしめる深紅の衣も月明かりの下となれば木々のほの暗い緑と区別がつかないはずである。そのまま息をこらしその場に潜みながら神官が見つめるうちに魔道師は奇態にも聖塔の壁に向かってその右手を拡げ伸ばした。いったい何をするつもりなのか？と疑問に思うちょうどそのとき月が雲間に隠れあたりは闇に閉ざされ、数瞬のちふたたび明るくなったときにはエズダゴルの姿は忽然と消え失せていた。

クラカーシユは跳ね起き相手が消え失せた地点に駆けつけると周囲の暗がりをあわてて透かし見た。だがいくら目をこらしてもそれらしい姿はどこにも見えない。ついに途方にくれた神官は呆然自失のあまり天をふりあおいだ。月はまさに天頂にあつて煌々と地上を照らし、その光にくつきりと輪郭を描きだされた巨大な聖塔の円錐形の鋭い尖端につきささらんばかりに低く、千切れ雲たちは吹きわたる風に流されていく。

あの闇はせいぜい脈にして三つか四つ。そのわずかな間にクラカーシユの目前から消え去ることはいかな魔道師と言えど翼でも持たぬかぎりできうるはずはない。後に残された可能性は……。神官は目の前の聖塔の壁に近づき、あの最後の瞬間エズダゴルがやっていたように右手を伸ばして冷たく滑らかなその表面に触れた。ち密な材質にはこれ

といった特徴はなく月明かりで見ても何ひとつ変わった様子は見えない。しかし拵げた掌でさぐるとごくわずかな突起が感じ取れた。ひとつひとつが芥子粒のように小さいが、それらが五つ不規則に並んでいる。

……不規則に？ クラカーシユはその微かな五つの点に右手の指先をひとつづつ重ねたとき掌が壁面にぴったりとはりつくことに気づいた。これはこの位置に掌をそえよとの何者かによる目印ではないのだろうか？

力を入れたつもりはなかったが不意に彼はそうして伸ばした手が突然誰かにつかまれ身体全体が力づくよく前方へ引き込まれるのを感じた。悲鳴をあげようとする間もなくクラカーシユは聖塔の不思議な材質でできた分厚い壁の内部に否応もなくひきずりこまれていた。

著者紹介

藍舟 はづき (Aibune Hazuki)

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/h_aibune.shtml

作品紹介

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_l/beat2/index.shtml

著作：魔獣狩師ラン

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/aibune/index.shtml

魔獣大陸

2005年11月8日 第1版第1冊発行

著者 藍舟 はづき (Hazuki Aibune)

発行人 中条 卓

発行所 アニマソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine>

制作 松谷 和加子 (電腦工房 りっくらっく)

表紙 三上 央子 (電腦工房 りっくらっく)

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載禁止させていただきます。

希望される場合はメール (master@sf-fantasy.com) にてご相談ください。